

# 幼児期の情意教育に就て (三)

大塚 喜 一

## 第三章 児童の下意識

幼稚園及小學校に於て、一般の幼童に向けらるべき先生の努力を著しく消耗し削減する特殊児童の居る事は、教育能率の増進上極めて遺憾なる障害であるが、是等の原因及矯正策は精神分析により児童の精神の奥深く潜在してゐる魔物の正體を明にする事に依りて發見せられる場合が極めて多い。今本章の緒言として東京朝日新聞に引續き掲載せられてゐた「我子のしつけ方」中の一例を轉載しやう。

『先天的かそれとも躰方を誤つた爲か、六才になる長女は小さい時から非常に氣短で、神經過敏で、時々突發的に危険な動作をやります。』

例へばお友達と仲よく遊んでゐる時でも、一寸氣に入らぬ事があると、相手を棒でたゝいたり、かみついたり、子供らしくない發作的の亂暴をするのです。しかし其發作状態が終ると、以前よりもおとなしく心が靜るので、其時懇々と諭しましても何の効果もありません。そこで考へあぐんだ末、二三ヶ月

前から左の方法を實行してゐますが、不思議に効果が目立つて參りました。

それは夜子供が眠りかけた時、即ち半意識の状態の時、そつと私は側で靜に子供の體をさすりながら「○○子は良い子だね、お父さまも、お母さまも、それから神様も○○子が一番好きですつて、ほんとにいゝ子だからね、お母様のいふ事をよくお聞きよ……」と云つた調子で優しく諭します。そして他人を傷つける事がどんなに悪い事であるかを教へます。そのうち子供は眠りますが、眠つてしまつてもかまはないのです、かうした事を毎晩繰返してをります内に、子供に段々落付が出て來て、途方もない亂暴はしなくなりました。いはば一種の催眠術ですが、此方法は育児の他の方面に應用してもきつと好結果を得るだらうと思ひます。』（あさ子投）

斯の如きは下意識が意識生活を支配してゐる極めて著しき一例であるが、下意識（例へば夢に現はるゝが如き心理作用）は多かれ少かれ絶えず我々の生活を其奥底に於て搖動かし、誘導牽制し又は攪亂してゐる。精神分析學の研究により、個人の性格の象徴とも見るべき日常生活の行動云爲より、人間の一生の幸福を左右し運命を支配するに至る迄、凡そ人生百般の事象は、盡く下意識界に盤屈し蠢動する様々の願望・欲求・情緒等に多分の因子を有する事が知られた。従て幼児期の情意教育上努力を注ぐべき中心點は、兒童の下意識に迄教育の効果を徹底せしめ、以て將來の幸福の根底を幼時に確立せしむる事である。幼児の下意識は殊に生後二三年間に於て最も可塑性に富みあらゆる影響を受け入れるやうに出來

てゐるから、下意識の教育は幼時期に於て之を施すのが自然であり有効である。編者は此方面に有力なる教育資料を求むべく探索する中、幸に一般精神分析學に關する著書よりは遙に兒童教育を主眼として論述せる Wilfrid Lay, —The Child's Unconscious Mind. (兒童の下意識) を漸く得たので、前二章に述べたる所と關係深き本書の内容を抜萃的に抄譯せうと思ふ。

#### 意識と下意識との交渉

先づ本書の第三章に述べられたる「意識と下意識との交渉」に就て、本文に必要な箇所を摘録しやう。

先づ意識が下意識に及ぼす影響に就て述べれば、ピアノの彈奏、外國語を話す事等の如く、練習に依りて獲得せらるゝ習慣は其一例である。(第一章) (參照) 最初曲譜と鍵盤とを對照して指を動かしてゐた意識的思考は、反復せる不斷の練習により徐々に下意識に傳達せられ、斯くして此下意識的思考が機械的に指を動かし得る様になり、其間に意識は更にそれ以上又は以外の目的に向つて活動し得る様になる。

我々が下意識の偉大なる力を統御し得るは實に之に及ぼす意識の影響に依るのであるから、下意識的精神活動をして文化の目的に副はしむる様に訓練し得らるる事は教育の問題に全く新しき見地を與ふるものである。我々は常に我々の下意識界に於て、意識上に發生せんとして互に争ひつゝある一群の連續的緊張の爲に影響せられ支配せらるゝものなる事を知らば、是等の緊張を統御して利己的より社會的利

他的に向はしむる道を知る事が早ければ早い程よい。今や此方面の新しき事實が日々發見さるるにつれ、斯かる下意識の機制に調和する様に教育の理論及實際を改正するの必要に迫られてゐる。(是等の實際に就ては、田中貳郎氏著「兒童生活心理學の原理と應用」東京市麴町區四番町七番地第一出版協會發行を參照せられよ。)例へば幼兒期に於て父母より受くる下意識的印象は一生涯を通じて子供の心の中に成長し、殊に青春期の性的生活に甚大なる影響を及ぼすものである。(後説參照)

次に、下意識が意識に及ぼす影響は總ての意識生活に就て見らるゝ程範圍の廣いもので、只其影響の顯著にして至大なると錯綜し變形されて捕捉し難きとの程度の差は場合により大に異なるものである。小は我々が日常爲す種々の間違ひより、大は人生に於ける偉大なる事業に至る迄、下意識は始終我々の生活の背後より陰顯出沒して、或は我々の目的活動を妨害し其豫想を裏切り、又は我々自らをも驚かしむる如き神人的偉業をも成就せしめる。將來の教育に於ては、家庭及學校に於て兒童の意識的遊戲や課業の裡に働きつゝある下意識的願望欲求等を分析的に研究して之を取扱ふに便ならしむべきであり、更に、下意識の拘束より生徒を解放する様なる機制の訓練を與ふる事に依り、今迄困難とせられたる學科や技能の練習等も喜ばしき専心熱中の裡に爲さるゝに至るであらう。そは教師が生徒の下意識的願望を理解して、學習を方便として之を達成せしめ且意識的願望の力を之に參加せしめたるに依るのである。かの早教育の智的方面に於ける驚くべき能率増進と偉大なる成功も、亦幼時より其下意識生活の統制(主と

して創造的願望の満足) 宜しきを得たるに負ふ所大なりと思ふ。

creational craving

### 同一化 (Identification)

次に、兒童の精神發達の道程に於て、「類似」(Similarity)を認むる働に依り、兒童は自己と外物又は外物相互間に類似を認める時期が来る。こゝに重要視すべきは兒童自身と他の人との類似である。斯かる類似を基として「同一化」なる作用が始る。これは多くの意識的思考及行動の基を爲せる下意識的精神過程である。人は己自身と他の人又は物とを同一視して、あたかも其人又は物が自己の一部なるかの如くに思ふものである。一體、精神的にも物質的にも「我」とはどの範圍までであるか? は嚴密に考ふれば困難なる問題である。

最も幼き年頃より我々は自己と他の人々を同一視する。我々の欲求に於ては意識的にも下意識的にも我々は一方に於ては自己と父とを、他方に於ては自己と母とを同一視するものである。我々が成長してかゝる同一化をせぬやうになつても、猶其作用は下意識に残留して其影響を全生涯に及ぼすものである。

又、此「同一化」の作用は、プロセクション及イントロセクションの二種に分たれる。前者は自己の精神状態を客觀的に投影する事、即「客觀的同一化」であり、後者は或る客觀の状態に自己を投じて之を主觀化する事、即「主觀的同一化」である。例へば子供が話を聞いてゐる時、其話中の主人公に

subjective identification

projection

introjection

objective identification

なりすまして、兼てより下意識内にて蠢動してゐた願望欲求等が子供の世界特有の仕方にて達成せられて悦に入つてゐるのは、主觀的同一化の適例であり、而して此お話を聽き終つた後に繪畫や製作や劇的表現等によつて其印象を發表するのは客觀的同一化の例である。此兩者は共に下意識的作用に屬するものであるから、其効果を全からしめむが爲にはお話の最中は勿論其前後に於て幼兒の下意識の機制を亂さないやうに慎重なる配慮を要するのである。

### 兩親の影響

次に、吾人に最も興深き本書の内容は

Chapter VI. The Aim of Education (第六章教育の目標)である、本章に於て著者は先づ「早期の印象なる」題下に於て曰く

「幼稚園へ行く頃迄の間の兒童生活の時期は、後年の性格の主なる傾向を支配する影響を及ぼすから、あらゆる方面に於て其兒の一生涯を通じて最も大切である。

子供はあらゆるものに依て印象されるが、特に人間交渉の環境に依て印象される。其印象力の強き事は、恰も精神が表現さるゝ塑像の質の上に刻印さるゝが如く、其殆ど永續的なる鑄型に比すれば其後の影響は比較にならぬ程である。一度此の印象が兒童の下意識に一定形を作るに至れば、それは其人の其後の生活に於けるあらゆる行爲を自動的に色付け又は修飾變形するに至る。」

と。更に斯かる印象の適例として、兩親が兒童に及ぼす影響に言及してゐる。

「夫婦の間が仲睦まじいか不和なるかは、其子供の性格に下意識的に影響して其青年期に於ける異性に對する態度及結婚後に配偶者に對する態度を支配するものである。

何となれば、性的信頼が開發せらるゝや否やは、只幼時に影響を及ぼす人々の性的信頼の模様を子供

*sexual confidence*

が觀察する事に依りてのみ決せられるからである。今一例を擧ぐれば、對者の眼をまともに見入る習慣は大なる愛の象徴である。眼は顔の何れの表情よりも最もよく眞情を語るものである。對者と視線の合する時、其方に見る子供は信頼の中に生育せられたる者であるが、之をそらす子供は其幼時に於て兩親より恥かしめられ罰せられ等して充分に其愛育を受け得ざりし者である。(人を視る其睥視に若くはなし)

青年期に入らんとする男兒にとりては、其父は他のあらゆる父が斯くあるべき模範と見られ、彼の父 *pre-adolescent boy*

が彼の母に對する態度に依て彼が後年其妻に對する態度が定まるものである。又子供は兩親の行爲に就て兎や角と評論する様になるものであるが、斯くなれば既に親の性格態度行爲等は子供に拭ふべからざる印象を與へてしまつたのであるから、兩親は其子供の面前に於て行爲を自制せんとしても時既に數年を遅れてゐる。(本文第二章中、幼兒の反射的模倣を述べたる所にて、兩親の子供に及ぼす下意識的影響に言及して親たらむとする人の責任の重大なるを力説したるは、茲に再び其論據を得たのである。吾人は

此尊むべき特權が正當に有効に行使されむ事を重ねて切望する者である。

此事は女兒に就ても同様である。彼女の父が快活にして沈着で物事に頓着せぬ性質であつたならば、たとひ後に彼女の夫となつた人が不快ならしくした性質の人であつても、彼女は之に對して何等怒る様な事は無いであらう。何となれば彼女は怒る様な性質を印象されてゐないからである。彼女は夫の不氣嫌に驚き、而して直に其原因を發見して之を除去せんとするであらう。云々……

以上は總て親及教育者をして、小兒の心性の可塑性・其完全なる把持力及其本質的永續性を、具體的に實現せしめむとの目的を以て述べたる所である。小兒の最も可塑的なる年頃（滿一—五才）に於ては、其環境の偶發的の（教育者の氣付かざる）印象を深く心に受取り、殆ど其儘に之を殘留してゐる。それは有生の原形質の上に刻印さるゝが故に、其効果は年と共に擴大せらる。」と。（p. 174—179）

小生思ふに、日に進み日に新にするは昭和の御代に處する日本國民の國是である。國家千年の大計を建つるは人を樹つるに若くはなし。早教育は實に上述の小兒の可塑性を善用して、國民最近の教育理想を實現せんとするものである。されば、此の幼時に於ける眞に自然なる神意に副へる教育は如何なるものであるか、之を現代に行はむとするには如何なる改造を要するかは吾人の當面の問題である。

バーン博士は曰く  
A. Barde

「卿が非常なる自克自制を以て獲得せる性格事業等も、早教育によつて幼兒の性格形成期に之に應ずる



教育を通じて與へらるゝ時は、自然に單純に技巧無く行はれ、かくして卿は人類の規準に確實にして永久なる進歩を與へ得るであらう。

此事は靈妙なる作用を藏せる一嬰兒より極めて大なる満足を引出す如くに思はれる。しかもこはあらゆる親たる人々が斯く勉むれば達し得る所である。」と。

更に本書の著者は性教育に就て注目すべき論述をなしてゐる。子供が最初に性に關して起す疑問は、自分が何時何處より如何にして産れたか？ である。かゝる問を受けた時、兩親は極めて冷靜着實に子供の質問に對してありのまゝの眞實を語ればよい。元來子供は兩親を絶對に信賴し、若し此信賴に副はざる疑點若くは不審なる態度が兩親にほの見えた時、子供は著しく之を苦にするものである。我兒の愛らしき口から子供にふさはしからぬ（と兩親が思ふ）性に關する質問が初めて出でたるに驚き、若し兩親が之を知らぬと云ひ又は説き古されたる神話的のごまかしたる答を與へ等したならば、茲に子供が被教育者として大切なる「信」が破られ、其結果子供は一般に人に對する信賴を失ふ様になる。又正當なる解答を得れば其儘に過去るべき性的疑問は、之を得ざりしが爲に満たされざる好奇心となりて子供の心に殘留し、子供自ら其解答を種々異様なる形に捏造するか、又は他兒の誤れる智識に耳を傾くるに至る。其結果彼は性的事物のみならず、あらゆる事物を見るに一種の智的斜視を以てする様になる。斯くして最初の性教育の失敗は、學校教育に致命的障害を與ふるものである。